

令和4年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告

研究のねらい

主体的な探究学習の実現に向けて～ICTの効果的な活用を考える～

令和4年度実施の高等学校新学習指導要領では「探究」が重要なキーワードとなり、「総合的な探究の時間」がカリキュラムの中で重要な位置を占める。そして、「情報Ⅰ」が新設され、令和7年度の大学入学共通テストから入試科目として実施されることになった。

「探究」は他教科との連携、ICTの活用が欠かせない。コロナ禍でオンライン授業が進み、対面授業と組み合わせたハイブリッド教育などICTの効果的な活用による新たな教育の展開が期待されている。同時に学校間等のICT環境や教員スキルのばらつきの解消が求められている。また、教科「情報」については情報科担当教員不足による学校現場の体制等の課題が山積している。

当部会ではICTを効果的に活用する「探究」と教科「情報」をテーマに講演、学校視察、研究協議等を通して学び、それぞれの学校のこれからの教育課程のあり方について考えていきたい。

会 期 令和4年6月17日（金）・18日（土）

会 場 常翔学園中学校・高等学校（大阪府大阪市旭区大宮 5-16-1）
大阪コロナホテル【新大阪会場】（大阪府大阪市東淀川区西淡路 1-3-21）

参加者数 128名

参加対象 理事長・校長・副校長・教頭・教務主任及び教育課程編成等担当教員

基本日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17		
		30	30		30	30 55	40	15 30			
6月17日 （金）					受 付	開 会 式	学 校 紹 介	授 業 視 察	施 設 見 学	実 践 発 表	全 体 会 （ 質 疑 応 答）
6月18日 （土）		講 演	基 調 講 演	昼 食		分 散 会	分 散 会 報 告	閉 会 式			

研修内容

■ 学校視察 常翔学園中学校・高等学校

- ◇ 視察校代表挨拶 田代 浩和 常翔学園中学校・高等学校校長
- ◇ 学 校 紹 介 佐々木 恵 常翔学園中学校・高等学校中学教頭
- ◇ 実 践 発 表 中野 裕文 常翔学園中学校・高等学校国語科教諭
- ◇ 授業視察／施設見学
- ◇ 全体会（質疑応答）

■ 講演

演題 「新学習指導要領及び大学入試はどう変わるのか」

講師 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

■ 基調講演

演題 「学校のデジタル化は何のため？ ICT 導入における“目的設定”の重要性」

講師 為田 裕行 フューチャーインスティテュート株式会社代表取締役
教育 ICT リサーチ主宰

■ 分散会 主体的な探究学習の実現に向けて～ICT の効果的な活用を考える～

■ 分散会報告

学 校 紹 介

常翔学園中学校・高等学校（理事長 西村 泰志／校長 田代 浩和）

建学の精神：世のため、人のため、地域のため、理論に裏付けられた実践的技術をもち、現場で活躍できる専門職業人を育成する。

教育の理念：「自主・自律」の精神と幅広い「職業観」を養い、目的意識を持った進学の実現により、将来、実社会で活躍できる人材を育成する。

教育内容：大阪市内に位置し、自然環境豊かな淀川に隣接、12 階建ての北館や 5 階建ての体育館など、全館 Wi-Fi 完備の恵まれた環境の中で生徒たちは学んでいます。1922 年に関西工学専修学校として創立され、今年はちょうど 100 周年に当たる記念すべき年になります。法人内には、大阪工業大学、摂南大学、広島国際大学の 3 つの大学が併設され、文系理系問わず、多彩な分野の学部にも内部進学することが可能です。

2000 年から学校改革に取り組み、教育の理念を実現するためのキャリア教育に力を入れ、「JOSHO CAREER-UP CHALLENGE」という高校 3 年間のキャリア教育プログラムを考案、実践してきました。実在する企業へのインターンシップを教室で体験する企業探究学習、企業探究学習で学んだ知識や手法をさらに発展させ、行政が抱える問題を解決する「Osaka City Project」やディベートの基礎に挑む「Young Leaders Plan」、AI・データサイエンスについて学び、2 年次には 8 つのゼミに分かれて好きなテーマで科学探究を行う「ガリレオプラン探究」、大学での学びについて理解を深め、自分の生き方を考える「夢発見ゼミ」等、実社会で求められる課題解決力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力などを養うためのさまざまなプログラムを用意しています。さらに、今年から中学校も理数研究やプログラミングを取り入れた STEAM 教育を始めています。

2017 年には iPad を一人一台利用した学習環境を実現しました。それ以来「ICT 公開授業」を毎年開催し、全国から 200 名を超える先生方にお越し頂いています。そこでは iPad を活用した授業の見学や研究協議、講演会などを行い、これからの教育を検討する場にしていきます。2020 年には教育イノベーションセンターを立ち上げ、イノベーション教育のとりまとめや主体的・対話的で深い学びの実践を広めています。

講師・指導員（順不同）

為田 裕行 フューチャーインスティテュート株式会社代表取締役／教育 ICT リサーチ主宰
田代 浩和 常翔学園中学校・高等学校校長
佐々木 恵 常翔学園中学校・高等学校中学教頭
中野 裕文 常翔学園中学校・高等学校国語科教諭
池田 弘 常翔学園中学校・高等学校教育イノベーションセンター長
平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

専門委員・指導員（順不同）

森 涼 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長
松谷 茂 文化学園大学杉並中学高等学校校長
鈴木 弘 香蘭女学校中高等科校長
北村 聡 京都外大西高等学校前校長
須藤 勉 東京私学教育研究所参与
川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

研修会日程・プログラム

【初 日】6月17日（金）

会場：常翔学園中学校・高等学校

12:30	受 付・資料配付	
13:00	開 会 式	【本館5階 第1特別教室】
	司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長	
	1. 主催者挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長	
	2. 視察校代表挨拶 田代 浩和 常翔学園中学校・高等学校校長	
	3. 役員・専門委員紹介	
	4. 研修会運営方針説明 森 涼 教育課程専門委員長	
	5. 日程説明	
	6. 閉式	
13:30	学校視察	【本館5階 第1特別教室】
	司会：池田 弘 常翔学園中学校・高等学校教育イノベーションセンター長	
13:30	●学校紹介 佐々木 恵 常翔学園中学校・高等学校中学教頭	
13:55	●授業視察 中学1年生から高校2年生までの第5校時の授業を視察します。	
14:40	●施設見学	
15:15	●実践発表 中野 裕文 常翔学園中学校・高等学校国語科教諭	
16:00	●全体会 視察校の先生への質疑応答	
17:00	●謝 辞 松谷 茂 教育課程専門委員	

【2日目】6月18日（土）

会場：大阪コロナホテル【新大阪会場】

9:30	講 演	【1階100ABC会議室】
	司会 須藤 勉 教育課程専門委員	
	演 題 「新学習指導要領及び大学入試はどう変わるのか」	
	講 師 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長	
10:30	基調講演	【1階100ABC会議室】
	司会・講師紹介・謝辞 鈴木 弘 教育課程専門委員	
	演 題 「学校のデジタル化は何のため？ ICT導入における“目的設定”の重要性」	
	講 師 為田 裕行 フューチャーインスティテュート株式会社代表取締役 教育ICTリサーチ主宰	
12:00	昼 食	
13:00	分散会	
	司会・進行 教育課程専門委員・所長	
	テーマ「主体的な探究学習の実現に向けて～ICTの効果的な活用を考える～」	
	「①ICT活用」、「②探究」、「③新学習指導要領・大学入試」をキーワードに協議	
	Aグループ 司会進行：森 涼 会場：2階200A会議室	
	Bグループ 司会進行：平方 邦行 会場：3階310会議室	
	Cグループ 司会進行：鈴木 弘 会場：3階315会議室	
	Dグループ 司会進行：北村 聡 会場：2階200BC会議室	
	Eグループ 司会進行：須藤 勉 会場：2階200D会議室	
15:00	分散会報告	
	司会・進行 北村 聡 教育課程専門委員	
	分散会5グループの協議内容についての報告	
15:30	閉会式	【本館5階 第1特別教室】
	司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長	
	1. 開式	
	2. 総括 森 涼 教育課程専門委員長	
16:00	3. 閉会挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長	

●概要●

令和4年6月17日(金)、18日(土)の2日間、「主体的な探究学習の実現に向けて～ICTの効果的な活用を考える～」を研究のねらいとして、初日は常翔学園中学校・高等学校、2日目は大阪コロナホテル【新大阪会場】(いずれも大阪府大阪市)で開催し、128名が参加した。

初日は13時から常翔学園中学校・高等学校にて、開会式、学校視察を行った。学校視察は佐々木恵・同校中学教頭の学校紹介の後、中学校12クラス、高等学校35クラスの5限目の授業を視察し、続いて中野裕文・同校国語科教諭の実践発表、最後に視察校の先生方と参加者による質疑応答が行われた。

2日目は、午前は当研究所の平方邦行・所長による講演「新学習指導要領及び大学入試はどう変わるのか」、為田裕行・フューチャーインスティテュート株式会社代表取締役による基調講演「学校のデジタル化は何のため？ICT導入における“目的設定”の重要性」が行われ、午後からは「主体的な探究学習の実現に向けて～ICTの効果的な活用を考える～」をテーマに、①ICT活用、②探究、③新学習指導要領・大学入試をキーワードに5つのグループに分かれて、分散会を行った。分散会終了後は各グループの司会進行を務めた専門委員・所長が各グループの協議内容を報告し、全体で共有した。



●開会式●

◆主催者挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

文部科学省は2017、2018年に8回目の学習指導要領の改訂を行い、高等学校では本年度より実施された。「主体的、対話的で深い学び」により豊かな創造性を養うという内容に興味や関心を持ち、同時に不安を抱いた学校や先生方がコロナ禍であるにも拘わらず、多数参加した。2日目に学習指導要領改訂の話をする予定だが、今年の高校1年生の3年後の大学入試についていろいろ検討されており、大きく動くことは事実であり、考えておくことは多い。今の児童・生徒たちが20年、30年、40年後にどんな社会でどう活躍ができるのか。それを教育するのが今の学校だ。我々は未来の子供たちにどのような教育をすればよいか。30年後に子供たちに「あの3年間、6年間は『ひどかった』』と言われたら、学校教育としては終末だ。未来を切り拓くことのできる若者を養成していかなければならない。この研修だけですべてを習得できないが、様々なことを学校に戻って考える一助となることを期待している。



◆視察校代表挨拶 田代 浩和 常翔学園中学校・高等学校校長

128名の先生方に北海道から九州にかけて参加頂き、心より感謝し、歓迎したい。

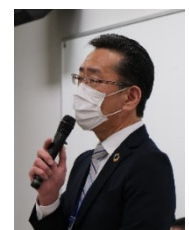
今年、創立100周年を迎える。その節目に全国規模の研修が行われることを非常に光栄だ。

コロナでICTが加速したが、2015年にICT教育推進プロジェクトを立ち上げ、その時から準備を始めている。最初はそのプロジェクトメンバーでいろいろな学校を見学し、アドバイスや情報を頂いた。2016年にiPadを100台購入し、先生方に使ってもらい、教職員への意識付けを行う研修会も開催した。その時に今回の講演講師の為田裕行先生に講演をお願いした。2017年に1人1台のiPadを使った授業を開始した。他校の先生方にご覧頂き、アドバイスを頂いて、より良いものにする事で、毎年秋に公開授業を開催してきた。この2年間は校内研修として実施している。ICT以外にも、20年以上前からキャリア教育、最近では探究やグローバル教育に力を入れている。学習指導要領の改訂で探究がキーワードになっているが、一般教科へ探究をどのように根付かせていくかが今の課題となっている。為田先生には6年ぶりに本校において頂き、6年間で常翔学園がどのくらい進歩したかをご覧頂きたい。



◆研修会運営方針説明 森 涼 教育課程専門委員長

コロナ禍で劇的に進化したのがオンライン授業だ。ニューノーマル時代のこれからの教育は、従来の対面授業とオンラインとの組み合わせによるハイブリッドな授業形態は必須である。国は全国の小中学校に1人1台の端末を整備した。そこで授業を受けた中学生が今年高等学校に入学した。その中で様々な課題を指摘されている。私学にとって、ICT環境の整備、教員スキルのバラツキが大きな課題となっている。その中で新学習指導要領が始まった。ICTを活用した探究型授業がカリキュラム・マネジメントの軸となった。また、教科「情報」が新設され、令和7年度から大学入学共通テストの入試科目となる。当部会は「主体的な探究学習の実現に向けてICTの効果的な活用を考える」をねらいに実施する。ICTを活用した探究と情報について、これからの教育課程のあり方を一緒に考えたい。



●学校視察●

◆学校紹介 佐々木 恵 常翔学園中学校・高等学校中学教頭

大阪市の近代化に貢献できる人材の育成を目的に開学し、現在、3つの大学、2つの中高を設置している。1922年に開校し、1950年に大阪工業大学高等学校、2008年に現在の常翔学園高等学校と改称し、2011年に常翔学園中学校を開校した。

5階建ての本館と12階建ての北館の2つの校舎、中高専用の体育館、河川敷グラウンドがあり、この環境下で生徒たちは部活動等に取り組んでいる。中学校は先取り学習のバランスも考え、週3回程度の活動だが、参加率が高く、今年の中学1年生の部活動加入率は90%である。

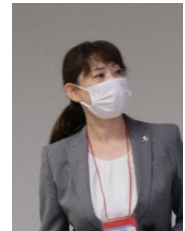
本校の強みは難関大学の合格実績、大学の併設校、先進的な取り組みで、目指す姿はこの3つの要素を併せ持つハイブリッドな学校である。建学の精神は「世のため、人のため、地域のため、理論に裏付けられた実践的技術を持ち、現場で活躍できる専門職業人を育成する」であり、教育目標にも「職業観を養い」や「実社会で活躍できる人材の育成」が盛り込まれている。ICT活用教育、探究型の学習は教育理念、建学の精神に通じるところで土壌となった。

高等学校には3つの特色がある。生徒の進路の目標に応じた5つのコース制、精神的なキャリア教育及びICT教育とグローバル教育。それらの教育を支える施設、設備だ。コース制はそれぞれの進路目標に応じたカリキュラムを展開する。中学校は今年度、新コースを設け、さらなるハイレベルな進路目標を設定している。進路実績のみに注目せず、これからの変動が激しい社会を生き抜く人間力を身に付けることが重要と考え、先進的な教育に力を入れている。キャリア教育は高等学校の5コースでより大きく2コースに分けたプログラムを3年間展開する。例えば17年前から取り組んでいるプログラムの企業探究学習は企業からのミッションを受け、生徒たちがそのミッションの解決方法を考え、提案する。ガリレオプラン探究は生徒たちがそれぞれの興味関心に応じて8つのゼミに分かれて研究を進める。大学との連携を図り、研究、発表し、3年次に論文を書く。Osaka City Projectは企業探究学習の行政バージョンだ。大阪市旭区の行政の課題を区長から頂き、グループ毎に問題解決のための発表会を実施する。海外の若者たちと英語コミュニケーションによるプログラムも行う。中学校は12年目を迎えるが、キャリアプログラムを進めてきた。今年度さらに常翔STEAMと名付け、3年間で6プログラムを段階的に分けて取り組み、高等学校のキャリア教育に繋げていく。このように生徒たちが主体的に取り組む授業に力を入れてきたが、これらを支えるICT活用が重要だった。2017年から1人1台iPadのICT活用教育を始めた。

ICT活用はグローバル教育の可能性も大きく広げた。海外研修旅行は研修的要素を強めたプログラムで実施した。希望者を募り、オーストラリアやセブ島で海外語学研修を行う。校内で留学体験をするGlobal Leaders Campの取り組みも進めている。昨年度からキャリア学習、ガリレオプラン探究で取り組んだ内容を台湾の高校生とオンラインで英語で発表し合うプログラムを行い、今年はフランスのバルトルディ高校との交流会もオンラインで実施している。

現在、学校ルーブリックと学習評価の2つの課題に取り組んでいる。学習評価は新学習指導要領で指導と評価の一体化が示され、3観点評価が入った。思考力、判断力、表現力、主体的に学ぶ態度の評価を課題として取り組んでいる。学校ルーブリックでは学校として育てたいものを見つめ直し、新しい学校の将来像を設定し、学校として育てたいコンピテンシーを考えている。本校の将来像は地域有数の進学校になることが目標だった。次のステップとして、生徒中心の自立的学習者を育成する教育先進校となる、もちろん生徒たちがこれからの将来、平和で幸福に生きて欲しい、そのように生きる力を身に付けて欲しいという思いで設定した。そして、コアコンピテンシーとして、知的冒険心、ヒューマニティ、レジリエンスを設定した。これらをさらに10個のコンピテンシーに細かく分けて、評価、実践したいと考え、学校ルーブリックを作成した。この学校ルーブリックを教科ルーブリックに落とし込んでいる。

今後の展望は、主体的学びを促進し、学習者中心の教育を実践していき、教育の理念や将来像、この実現を目指す取り組みが全校的なものになるよう、学校ルーブリックの活用やさらに行事ルーブリックの作成等も行い、より革新的で創造性が増える授業を実現し、この地域の新しい学びの中心的存在になるということである。



◆授業視察

中学校

No.	学年組	コース	教科	科目	探究	ICT 活用	授業内容
1	中1 1	スーパーJ	数学	数学		○	文字式
2	中1 2	特進コース・I類	英語	英語		○	be動詞 is / 色々な疑問文
3	中1 3	特進コース・II類	数学	数学		○	文字式
4	中1 4	特進コース・II類	英語	英語		○	複数の人やものについて説明しよう
5	中2 1	I類	音楽	音楽	○	○	共有・共感と創作
6	中2 2	II類	英語	英語		○	動名詞
7	中2 3	II類	社会	社会		○	律令国家
8	中2 4	II類	国語	国語		○	古文読解
9	中3 1	I類	数学	数学		○	二次関数と方程式
10	中3 2	I類	英語	英語		○	後置修飾
11	中3 3	II類	国語	国語		○	現代文読解と記述の解答の作り方
12	中3 4	II類	技術家庭	技術	○	○	Keynoteでのプレゼン

高等学校

No.	学年組	コース	教科	科目	探究	ICT 活用	授業内容
13	高1 1	一貫・I類	総合・探究	ガリレオプラン探究I	○	○	SDGsに関する探究活動

14	高1	2	一貫・Ⅱ類	英語	英語コミュⅠ		○	音読・対話活動
15	高1	3	スーパー	総合・探究	ガリレオプラン探究Ⅰ	○	○	SDGsに関する探究活動
16	高1	4	薬学・医療系進学	総合・探究	ガリレオプラン探究Ⅰ	○	○	SDGsに関する探究活動
17	高1	5	特進	国語	現代の国語		○	ものとことば
18	高1	6	特進	総合・探究	企業探究	○	○	企画会議
19	高1	7	特進	英語	英語コミュⅠ		○	多読・音読活動
20	高1	8	特進	数学	数学A		○	場合の数
21	高1	9	文理進学	情報	情報Ⅰ		○	プログラム
22	高1	10	文理進学	国語	現代の国語		○	芥川龍之介「羅生門」
23	高1	11	文理進学	数学	数学Ⅰ		○	二次関数
24	高1	12	文理進学	英語	英語コミュⅠ		○	論理の構成
25	高1	13	文理進学	理科	物理	○	○	重力加速度の測定
26	高1	14	文理進学・スポーツ	保健体育	体育Ⅱ		○	バスケットボール
27	高2	1	一貫・Ⅰ類	数学・地歴	数学Ⅱ・世界史	○	○	歴史の中の数学 微分編
28	高2	2	一貫・Ⅱ類	英語・国語	コミュ英語Ⅱ・現代文B	○	○	英語歌詞の日本語翻訳に挑戦
29	高2	3	一貫・Ⅱ類	家庭	家庭基礎		○	家族・家庭生活を考える
30	高2	4	スーパー	数学	数学Ⅱ		○	微分
31	高2	5	薬学・医療系進学	理科	化学	○	○	量的関係
32	高2	6	特進	理科	生物		○	DNAの構造
33	高2	7	特進	理科	物理	○	○	円運動と単振動
34	高2	8	特進	総合・探究	ヤングリーダーズプラン	○	○	探究活動(旭区の魅力を見つける)
35	高2	9	特進	数学	数学Ⅱ		○	微分
36	高2	10	特進	地理歴史	世界史		○	イスラーム世界
37	高2	11	文理進学	理科	化学		○	溶液
38	高2	12	文理進学	数学	数学Ⅱ		○	図形と方程式
39	高2	13	文理進学	総合・探究	夢発見ゼミ	○	○	SDGsと私たち
40	高2	14	文理進学	国語	古典B		○	物語の読解と文法
41	高2	15	文理進学	地理歴史	日本史		○	奈良・平安時代
42	高2	16	文理進学	家庭	家庭基礎		○	被服実習
43	高2	17	文理進学・スポーツ	保健体育	体育Ⅱ		○	バレーボール
44	高3	1	一貫・Ⅰ類	総合・探究	ガリレオプラン探究Ⅱ	○	○	2年次研究の発表 発表チーム有志
45	高3	4	スーパー	総合・探究	ガリレオプラン探究Ⅱ	○	○	2年次研究の発表 発表チーム有志
46	高3	5	薬学・医療系進学	総合・探究	ガリレオプラン探究Ⅱ	○	○	2年次研究の発表 発表チーム有志

◆施設見学

8グループに分かれて、視察校の先生方の案内と説明により図書館や体育館等の施設を見学した。



授業視察の様子



施設見学の様子



◆実践発表 中野 裕文 常翔学園中学校・高等学校国語科教諭

新学習指導要領では「知識・技能」だけでなく、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点バランスよく評価することが求められている。「知識・技能」はテスト等で評価しやすい。しかし、「思考力・判断力・表現力」あるいは「主体的に学習に取り組む態度」をどのように評価していくべきか。

本校の学習評価は知識・技能が80%、平常点が20%だったが、今年度から「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」を学習活動の中で、より丁寧にみて評価していこうということになり、1学期の中間テストを廃止し、6・2・2の割合とした。従来の評価は最後の総括的評価のみが大きな比重を占めており、その数字に指導者も生徒も保護者も一喜一憂して終わっているのが現状であった。3観点評価により、今後先生たちの評価にかかる時間はさらに増えていくことが予想される。それを生徒の学びや学習改善にどのように役立てていくべきか。本実践では、生徒の力を引き出すためルーブリック・形成的評価を活用しながら自主的な学習者を育てることに主眼を置いた授業を試みた。

まず単元の学習を通して「どんな風になって欲しいか、どんな力をつけて欲しいか」という学習目標を明確にする。その上で「どのような基準でどのように評価するか」という達成基準を明確にする。そして、それらをパフォーマンス課題・ルーブリックに落とし込み生徒と丁寧に共有する。学習目標に合わせて「思考力・判断力・表現力」・「主体的に学習に取り組む態度」をどのように評価するのかを明確にすることで、学習への動機づけとし、それらなるべく客観的に公平に評価できるような学習活動を考え展開していった。

振り返りの際は、生徒自身がルーブリックを駆使し自己評価を行い「できていること」と「できていないこと」を把



握し、必要な手立てを講じながら学習を改善していく。あるいは、指導者からのフィードバックにより、学びの現在位置、できていることと、できていないこと、どうすれば学習が改善できるか、次に取るべきステップは何か、を具体的に示す。そのような単元の途中に行う形成的評価を効果的に活用することで、生徒自身で学習を調整し改善を図っていくようにしながら「自立的な学習者」の育成へとつなげていけるのではないかと考えた。

もう1つは、生徒の主体性を発揮させるために答えのない探究的な課題を設定し取り組ませた。その学びを活性化させるものとして、ホワイトボード・ミーティングという手法を問入れ、自分たちで話し合いを深めていく力を育成していく実践を試みた。(本実践ではJamboardを活用した) 答えのない探究的な課題の設定と取り組みは、本校の長期的な目標の「グローバルシティズンシップに身に付ける」が国際バカロレアの考え方の「これから国際的に活躍できる人物を育てる」にリンクすると考え、国際バカロレアの使命、目指すべき姿を具体化した10の学習者像(Learner Profile)を使い、授業に活用した。この学習者像を自分自身にあてはめると、自分に特徴的に見られるところ、足りない、弱いところがある。持っていない物が1つでも手に入れば、自分の人生、物語は変わっていく。ホワイトボード・ミーティングは生徒がファシリテーターとなる実践だ。生徒が自分たちの力で話し合いを進め、相手の力、思い、考えを引き出しながら読み深めていく。ファシリテーターがオープン・クエスチョンという技を活用し相手の考えを上手に引き出していく。その意見をホワイトボードに書き集め(拡散)、その中で絞っていく話し合い(収束)を展開し、今後の学習に活用できるものは何かについて話し合っていく(活用)。この3つのプロセスを経て、合意形成、課題解決ができる力を育成する。話し合いを進めていく人をファシリテーター、参加者をサイドワーカーと呼び、互いに役割を持たせ、役割を果たすことで話し合いを深めることができる。

それらの学習を支えるのがパフォーマンス課題とルーブリックである。目指す姿を明確化するため、この学習はどこに向かい、何をを目指すのかを学習意図も含めてルーブリックに明示する。ルーブリックには単元を通しての理想の学びの姿が具現化されている。また、段階的な観察可能な行動が描写されており、学びの現在位置、次に何をすべきかを示すためのメッセージが込められている。大切なことは生徒自身がルーブリックを活用し、「どこが上手くいっている、どこが上手くいっていない。何がどれくらいできていた。どこができていなかった」と自己評価しながら自分たちで学習活動を調整しながら改善していくことができるかである。本単元では各スキル毎に段階を作り、自分はどこまでできているかを調べるができるルーブリックを作成した。また、ワークシート作成や毎回のチェックに時間がかかるためGoogleWorkspaceのスプレッドシートやGoogleFormを利用して形成的評価を効果的に行った。授業後にはスプレッドシートで個々の成長と課題を見える化し、学習を改善させていった。最後に総括的評価としてルーブリックを見ながら自己評価、ファシリテーター・サイドワーカーとしての力をまとめ評価した。大切なことは生徒自身がルーブリックを深く理解し活用できることだ。一度指導者が作ったものを生徒に投げルーブリックの改善点を聞き修正した。このプロセスを踏むだけで生徒がルーブリックを深く理解し、少しずつ自分たちで使えるようにもなってきた。

以下は実践を通しての成果と課題である。

この学習を通して生徒がファシリテーターとして成長すると、友達の意見を上手に聴くようになる。互いに聴きあえる良い関係ができ、互いの力を上手に引き出し、自然と人間関係まで良くなる。ホワイトボード・ミーティングは自分たちで学びを深める授業を実現する可能性のある手法だ。

ICT面では、直接言葉の応酬ではなく、間にJamboardのような緩衝物が入ることで双方向的になりグループで一体感ができる。ICTを効果的に活用することで評価、フィードバックの時間を短縮できた。

ルーブリックは指導者と生徒の間で身に付けたい力や目標を共有し、明確化し、生徒も意識しながら自分達で動き始め、できていることと足りないところを意識し、自己評価を促す手立てとなり、自分で学習を調整し改善していくものへと変り得る。授業において、学習評価はメインではないが、生徒の自己調整能力を伸ばすためには欠かせない。

形成的評価、フィードバックは生徒をよく観察し、良いところを見る必要があるため、指導者の授業での生徒の見方が大きく変わった。

ホワイトボード・ミーティングの手法は継続していく必要がある。4月から生徒をファシリテーターに育てる目標で学級活動・道徳も含めて行っている。1回や2回の授業でできたわけではなく、継続して取り組んでいる。地道な取り組みを続けられない限りうまく機能せずに終わってしまうことが懸念される。

パフォーマンス課題やルーブリックはテスト範囲を早く終わらせて空いた授業時間で実践した。テストで点数を取ったり偏差値を上げたりすることも大切なので、知識伝達型の授業と探究型学習の価値を伝え、バランス良くやるのが大切だ。特に「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」を生徒や保護者にシラバス等でこの単元でこう評価するというを示すことも大切だ。ルーブリックも生徒の成長に寄与しないと意味がないため、生徒の実態を踏まえて適宜改善していくことが大事である。

思考力・表現力・判断力もパフォーマンス課題、ルーブリックである程度公平で客観的な評価ができた。主体的に学習に取り組む態度は授業時の観察、自己評価、振り返りで客観的な評価を行ったが、その生徒の自己評価が本当に正しいのか、本当に自己評価のみでルーブリックの基準を達成しているのか、指導者の評価は単なる思い込みではないのか。一人ひとりの学びの質や態度を客観的に評価することは難しい。今後も改善の余地がある。

◆全体会(視察校の先生への質疑応答)

Q: Jamboardを使った結果、ルーブリック評価での変化以外に別の観点で生徒たちの特徴的な変化はあったか。

A: 何度もフィードバックして諦めずに続けてきた結果、グループにおいて自分たちで聞き合う、先生の力がなくても自分たちで話し合いを深めていく力についてきている。

Q: 探究的な学びを国語に取り入れることは自由度も高く、ねらいを発揮できる授業計画だと感心したが、そのあたりのことを知りたい。

A: 本質的な問いや永続的な理解はあまり意識せず、生徒がやりたがり、ワクワクし、頑張れる課題を意識している。

Q: 1学期の中間テストを廃止した理由が知りたい。

A: 1年生は行事も多く、5月の中旬にテストは慌ただしいので、1学期の中間テストを廃止して、思考力、主体的に学ぶ態度を丁寧に見ようという方針が変わった。評価が変わり自分たちも変わらなければならない状況だが、生徒も6・2・2を意識しておらず、中間・期末テストが大きな評価の項目でまだ浸透していない。これからどれだけ思考力、主体的に学ぶ態度を重視するかであるが、知識・技能の面で私たち教員も含め、そのウエイトが大きい。中間テストは、今年度は1学期のみ廃止にした。1つに授業時間の確保、1つに新しい学習指導要領で3観点を評価とともに伸ばすため、テストよりも普段のスマールステップを大事にし、単元テスト、パフォーマンステスト等で測っていくというねらいがある。様子を見て2学期の中間テストもなくし、期末テストのみにすることも考えている。テスト自体がない学校もあり、そのような動きになっていることだ。

Q: 複数のプログラムを同時に動かすにはどのような工夫、人員配置をしているのか。

A: 2019年度に教育イノベーションセンターを設立した。キャリア教育、ICT教育、グローバル教育の所管部署で、特にキャリア教育はキャリア教員を配置し、担任とキャリア担当とのチームティーチングを運営している。

Q: キャリア教育プログラムの実践で生徒・教員・学校の変化、実践に至る過程での失敗例などはあったか。

A: キャリア教育は20年程前から始めた。その中でも中核的事業が企業探究、コーポレートアクセスコースである。最初は何のために行うのか、進学実績や生徒の成績が上がるのかという意見もあった。TeacherではなくFacilitatorと呼ぶのは新鮮で革命的だったが、反対の声もあった。しかし、生徒たちのパフォーマンスを見て素晴らしいと感じ、この授業に関わりたいという先生も出て徐々に学校が変わった。様々な取り組みとともに、生徒の学力、進学実績も向上し、今に至っている。

Q: 中学校・高校のICT教育に対する法人内の大学からの支援の状況はどうか。

A: キャリア教育、探究の授業は、学園内の大学からいろいろなサポートを受けているが、ICTは高校独自で行っている。ただし学園にICT連携機構があり、導入の際にアドバイスを頂いている。

Q: 新課程スタートに際し、大きな変更点がある国語と社会の取り組みと「情報」の入試対応策について。

A: 国語科では3観点評価、6:2:2に対応するための単元別のルーブリックの作成を各先生方に依頼し、各単元で探究型の授業の実施を目標としている(1学期に1回以上探究授業に取り組むことが目標)。次年度以降は私立理系型のクラスでも古典探究を行う。これは目的が受験ではない勉強、リベラルアーツな教育を目指すための取り組みだ。社会科では高校1年生で新科目「公共」、「歴史総合」が始まった。「公共」は知識、考えのための思考判断の流れが作りやすい教科である。知識分野はこれまでの「現代社会」と変わらず、単元毎に授業プリントや演習プリントで行っている。単元毎に自分の意見や考えをロイロノートに音声で吹き込んで提出させている。「歴史総合」は最近の入試問題は地図問題が頻出しており、iPadで歴史地図の変遷を確認することを強調している。この科目では探究に入る初期段階で、興味を引くことも考えている。少ない単位数で探究を行うので自主学習ができる教科書を選んでいる。情報の授業は高校1年生で2単位のみ行う。2・3年生で授業がないため、2年後の大学入学共通テストで対応できるか疑問があり、今後の課題として3年次に夏季特別講習等で集中講座にて補填する必要があると感じている。

Q: 他府県の高校生や海外の高校生とのオンライン交流は具体的にどのようなことを行っているのか。

A: ガリレオプラン探究II(高校2年生探究授業)の中に台湾Exchange Programがあり、昨年度から自分たちが研究した内容を英語で台湾の研究チームと研究交流している。また、フランスのバルトルディ高校の2年生の生徒とオンライン交流を行っている。ICT化への取り組みのためアプリの研修や紹介を行った。研修は2021年度からオンライン授業が常にできる状態で、Google ClassroomからのMeetを基本にしているが、Zoomでも行っており、その研修会を教育イノベーションセンターが年度初めに行っている。それ以外にも一般の研修会を6・7月に行っている。

Q: 「情報」の授業内容は教科書ベースの入試を意識したものか、オリジナルのものを開発しているのか。

A: 講義と実習を半分に分けている。昨年度までは実習中心の授業だったが、大学入試共通テストの科目になるので、本年度から講義で教科書を一通り行う。実習は、1学期はPowerPoint、2学期はExcel、3学期はプログラミングというようにオリジナルの課題を作り、行っている。

Q: ICTを導入するデメリットはあったか。情報科の教員はどの程度、他教科とコラボレーションしているか。

A: 導入時はiPadでのイタズラ等の生徒指導案件が続いた。コラボレーションは特に意識していない。今後、3観点評価等で関わってくるので必要になると考えている。

Q: キャリア教育でどのような生徒を育成し、どのような社会人になってもらいたい。また「グローバル×キャリア」という視点を教育活動にどう取り入れるか。

A: 自主・自立の精神と幅広い職業観を養うという教育理念を持っており、目的意識を持った進学の実現により、将来、実社会で活躍できる人材を育成したい。グローバルとキャリアだが、オンラインでの海外交流から海外研修旅行へつながるようにしている。ガリレオプラン探究はすでにPBL型になっており、海外への修学・研修旅行に行く際、自分たちが研究した内容を持ち、大学や高校でその内容を英語で伝え、吸収してくるというように研究を目的とした交流としている。

Q: ICT推進、活用を組織的に進めるためのポイント。私学は経費面や教員の業務量からも困難な面が多々あるが、どのように工夫されているか。

A：初期段階でプロジェクトを作り、メンバーが一致団結し、成功させようという意識があったことが ICT 活用の進んだ要因だ。さらに管理職のバックアップも大きい。先生方には ICT は業務を効率化して、仕事を減らすことにつながると伝えた。ICT は準備等の仕事が増えることもあるが、基本的には減と考えている。

Q：プログラムの導入の経緯と実施するにあたって発生した問題の克服の取り組みについて。

A：2000 年頃は全国的にキャリア教育が普及した時期で、インターンシップを取り入れる学校もあった。本校も職業安定所主催のジュニアインターンシップに応募し、希望者がインターンシップに参加した。600 名以上の中の 30 名の参加で限定的だった。また総合的な学習の時間が始まった時期であり、本校の高校生は進路ノートというもので進路学習を行ったが、調べ学習のため生徒にとって調べてノートに記入し、発表するだけのものだった。インターンシップを生徒全員にできないかと企業探究を始めた。最初は学校全体のキャリア教育になっていなかったが、他県の学校を視察し、参考して常翔キャリアアップチャレンジを作った。

Q：「働き方改革」の状況、教員スキルのばらつき解消に向けてどのような対応を行っているのか。プログラミングへの対応をどうしているのか。

A：数年前から閉門時間を 22 時から 21 時 30 分、21 時と段階的に早めている。本年度より年変形労働制を導入し、一般教員型、部活動教員型、3 年教員型の 3 パターンに分けている。月間の労働時間を 2 ヶ月前に予め決めてもらう。これは意識改革の途中段階で、実際はもっと働いている等逆の場合もあり、うまく時間配分ができるまで 2・3 年はかかるだろう。部活動の問題は現在、検討している。教員間のスキルのばらつきは教科による特性もあるが、センターで年度初めに研修を行っている。若い先生はすぐできるようになるが、ベテランの先生はなかなかうまくいかず、サポートしている。プログラミングは情報科に 2 人の専任教諭がおり、外部の研修等にも参加している。

Q：5 年前にも数学の授業を視察したが、座学講義形式に近く、ロイロノートでプリントを回収して共有する形であった。今回は机を移動して行われていたので変化があったと思うが、どのようなことを考えながら授業改革をしているのか。また、ループリックは数学科ではどのように作っているのか。

A：授業は各教員のスタイルにより、グループ形式と座学形式様々である。自分自身、昨年度はグループ形式で行っていたが、今年は高校 3 年生のため座学形式で iPad を使い、ロイロノートで画面配信をしながら授業を行っている。基本的には各教員に授業を委ねている。ループリックに関しては数学科教員全員がそれぞれ担当して作成した。

Q：世界史と数学を融合させたような授業があったが、このスタイルはいつ頃からどのような意図で始めたのか。実際の生徒の反応や評価はどうか。

A：実は本日（研修会）のために数学と世界史のコラボレーションを初めて行った。微分積分が発達した背景には世界史があり、世界史上の人物の考えと数学がマッチしているということ、大学入学共通テストを見ると教科横断型があるため、試行させて頂いた。

●講演 ● 「新学習指導要領及び大学入試はどう変わるのか」

講師 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

本年度から高等学校で改訂された新学習指導要領による授業が始まった。ここ数年の大学入試の内容を分析すると、相当変わってきた。学習指導要領に縛られている教師や大学も多いが、学習指導要領は学習レベルの最低基準であり、それ以上の内容を受験に出題する事は差し支えない。

ところで、わが国の教育を考える上で大幅な出生数の減少は無視することはできない。今後、生産年齢人口が急激に減少していく。人口と経済が右肩上がりの時代は学歴社会が大きく意味を持ち、社会に浸透していった。知らず知らず格差も広がり、社会の分断が見え隠れしている。それにも増して、環境破壊が進みつつある。現在は、1968 年に組織されたローマクラブを手本として 2015 年に国連サミットで調印された持続可能な 17 の目標を達成する SDGs が世界に広まりつつあり、2030 年までに達成することになっている。

今の中高生は右肩下がりの時代に生を受け成長し、教育を受けて大人になっていく。そして、世界で活躍して行く。これだけ複雑に変容した社会の中で、日本の教育が変わらないのは滑稽である。70 年間、わが国の教育の骨格は変わっていない。個々の新しい学びの経験を今の子供たちは新しいとは思わない。時代、社会が異なる。世界中も大きく変容した。その中では新しい学びの経験が必要であり、地球全体が循環型社会を築いていかなければならない筈だ。最近の若者(1995 年以降生まれ)は Generation Z と言われ、もう既に Generation α(2010 年以降の生まれ)が中学生になろうとしている。Y 世代や X 世代とは基本的に違う世代である。一番の違いは「デジタルネイティブ」である。

我々の世界では Generation Gap は非常に大きく、勢いよく進行している。Z や α の世代を本質的に理解できなければ、学校内で教師と生徒の間のトラブルに発展する可能性がある。このようなことから Generation Gap を自覚する必要がある、それに対応する教育を学校内で議論していくべきだ。教室の形の違和感も考えて欲しい。

1989 年は日本経済のバブルが崩壊し、昭和から平成へ時代は進んだ。また、世界ではベルリンの壁崩壊、そして冷戦構造の終焉と言われたが、混沌としたカオスの世界が続いている。それと同時期に「グローバリゼーション」の始まりである。そこでの教育は「英語」と「コンピュータ」が大きな役割を担うようになり、主役の座についたのだ。日本では 1990 年頃は、一般的にはパソコンは普及していなかった。しかし、20 世紀後半には西欧の中心国、アメリカやアジアの一部の学校教育ではパソコンが主役となり活用されていった。

多くの先進国がグローバル資本主義を視野に入れ、グローバル金融資本主義に向かう教育改革を進めていく動きがみられた。知識や技能、過去の経験で未来に起こるであろう問題に対応できるだろうか。「教育＝知識・技能」では世界の中で立ち後れていく。21 世紀になると教育に求めるものがさらに変わった。レクチャー型授業から双方向型授業への移行が必要だ。その中で重要となるのが「建学の精神」だ。PBL・PIL、ICT、リベラルアーツ、STEAM、CEFR、



このあたりを意識した教育が行われているのか。グリットの育成も重要である。「建学の精神」とは未来を切り拓く使命だ。同時に「時代が求める究極の魂」が建学の精神の中に込められている。それは生徒が困難に屈することなく、勇気を持って高邁な精神を持ち、生きていく上での指針になる。それを生徒や保護者に伝えていかなければならない。家庭の教育方針と学校の建学の精神が不一致だと悲劇が起こる。学校と家庭が求めるものが同じでないといけない。ブルームのタキノソミーを学校の中できちんと学べば、新しい教育への道が切り拓ける。「批判創造的思考 (Creative thinking, Critical thinking)」を養うためにはどうするのか。日本の教育は「知識・理解」、知識を応用し、分析して論理的思考力までで止まっている。学習指導要領には今まで「創造性」という言葉が出てなかったが、今回の学習指導要領で初めて登場した。多くの指導者はどうすればよいか分からないだろう。しかも、学習指導要領には方法は一切書かれていない。いろいろな学校の指導者と情報を共有することが重要だ。「思考コード」の理解と活用が重要になる。「知識、理解、応用、論理、批判、創造」を縦にして難易度を高めていくと、A、B、C軸に分かれるが、今まで入試にC軸の問題は殆ど出ていない。「知識偏重」と言われているが、論理的思考力をもっと教育の中へ入れなければならない。20世紀の後半には海外の先進国は「論理的思考力では役に立たない。予測不能な社会に対して創造的思考力を育む教育を広げなければならない。」と考えていた。

ところで、2089年の世界を想像したことはあるだろうか。これからの21世紀を生きる子供たちを育てている我々はしっかりとした責任感を持って教育に携わらなければならない。未来の社会をどのように変えていくのかは学校教育の大きな責任だ。2017、2018年の新学習指導要領が8回目の改訂だ。大きな目標は「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創る」である。高大接続改革会議の議論での、新しい学力観は知識・技能の十分な基礎の上に、思考力、判断力、表現力、そして協働的な力も学力に含み、学力の三要素と変更された。ここでも「創造性」は入っていない。「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の3視点が出されたが、注意する点がある。①学ぶことに興味関心を持たせることは、一方的な授業では難しいこと。②自己の考えを広げ、深めるための授業実践を考えなければならない。学校に真の自由もなく、興味関心もない状態で創造性は養われるのか。創造性豊かな若者を育てることは論理的思考力を身につけるだけでなく、批判創造的思考力を身につけた若者を育てることである。これを学校教育で行おうとしている。今までの知識偏重の授業では身につかない。興味関心が重要になると同時に、感性や思いやり、好奇心、興味関心がなくても主体的・対話的で深い学びは成り立つが、それが深い学びとなるのか。近年、中学入試と大学入試は創造性を問う問題が扱われる傾向がある。大学入試では単一的な受験指導では間に合わない。東京私学教育研究所では「思考コード」と「研修コード」が一体となって教育を進めていくために「研修コード」を作成している。深い学びは評価とは別に授業デザインで興味関心を考慮することが重要だ。テーマや課題を教師が決めても、深い学びは実現できるが、感性、思いやり、好奇心、興味関心は育ちにくい。カリキュラム・マネジメントは、教務が担うのではなく、専門部署をつくり、学校の中で推進していく必要がある。私立学校は先進性、先見性、独自性を守らないと意味がない。これから創造性を育てていくには自由を尊重した校風が必要だ。自由がないところに創造性は生まれない。同時に多様性を受け入れる受容力、そして、寛容性も必要だ。これらを踏まえ、今後、どのように創造性を育てていくかを考えなければならない。自由と寛容性は双方向の学びと、社会課題を解決するにはアイデアやイノベーション、最も大切なのは、実行力を生み出す精神（学校としての精神と教員としての精神）である。

●基調講演● 「学校のデジタル化は何のため？ ICT導入における“目的設定”の重要性」

講師 為田 裕行 フューチャーインスティテュート株式会社代表取締役／教育ICTリサーチ主宰

私は教育のコンサルティングをしており、私立学校や教育委員会、学習塾や教育系の企業の手伝いもしている。もともと、プレゼンテーションの仕方を子供たちに教えたり、論理的思考力の身につけ方（授業の仕方）を教えたりしていたが、ここ数年はICTの案件が多く、タブレットの取り扱い方を問われることが多い。



「①デジタル化の必要性、全てデジタル化する必要があるのか」、「②何のためにICTを活用するのか、従来のアナログな手法をやめるデメリットはないのか」という事前質問があった。質問①は結論から言って全てデジタル化する必要はない。メモの取り方もPCもあればペンの人もいて、自分に合った形で情報をまとめている。両方できる必要はある。質問②はデメリットもある。ICTは非常に高価で、使い方が難しく、導入すると周りがどれくらい使っているのかも気になる。しかし、学校で使う教材や副教材、プリント、参考書が生徒たちや先生にとってどのくらいの意味があるかと同じことと同義だ。導入しても変わらないと思えば導入しなくてもよい。ICTは導入するかしないかの0か100かで考えられがちだが、バランスの問題だ。どのくらいのバランスでデジタルとアナログを使うかを考えることが大切だ。

デジタルが得意か苦手かという質問がよくあるが、どれくらいデジタルを使えば得意／苦手と言えるかが分からない。これが分からないから、自分の学校がどのくらいデジタルを使っているのかも分からない。管理職の先生は「デジタルを使えるようになろう」という広義的な投げかけよりも「自分の学校は～のような授業をしたいから、～ができるように生徒たちがデジタルを使えるようにしよう」と言えば先生方も頑張る方向性が見えてくる。教材やシステム、教授法等先生方が普通に行う正当な評価をICTの分野でもやってほしい。全部が全部ICT化すればよいのではなく、ICT化することで子供たちの学びがどう変わるのか、先生方の教え方がどう変わるのかをしっかりと言語化して学校の中で共有することが大切だ。多少のデメリットでICTを切り捨てるのはもったいない。ICTを使えば先生方が教えたことや子供たちに身につけさせたいものを教えられる機会になる。

どのように1人1台端末を導入するかという話はそろそろ終わらせ、これからはなぜ1人1台端末が必要なのかを

考えていかなければならない。学校がその答を持っていないのはおかしい。「学校のデジタル化の最大の目的は何か」、「教育のデジタル化の目的は効率化なのか、教育の質を高め、新たな可能性を拓くことなのか」、「ICT教育の活用でさらなる学習効果を上げるためにどんな取り組みをすべきか」という事前質問があった。学校によって作りたい学びの環境は違う。当然、子供たちも違うし、文化環境・地域環境も違う。どの学校も同じことを目指す必要はない。先生方がどのような学びを行いたいかを決める時、一番子供たちのことを見ている、保護者のことも知っていて、地域のことも知っている先生方が出す答が正解だ。そのために最大の目的を何にするかを考えなければならない。個人的には、デジタル化の最大の目的は「子供たちが学びや表現、思考の道具としてデジタルを使えるようになること」と思っている。コロナ禍でオンライン授業が進み、様々な授業支援ツールも使われるようになった。先生方の効率化だけではもったいない。それぞれの学校でどのようにデジタルを使いたいかということはどういうような生徒を世の中に送り出したいかにつながる。そこで、その生徒たちに必要な力はどのようなものか。その中にデジタルを使いこなす力が入っているのかまで考える必要がある。デジタルの価値観を共有できるかどうかは学校にとって大きい意味を持つ。デジタルは使えれば便利という程度の話ではない。スティーブ・ジョブズはデジタルを「知の自転車」と称している。私にとってデジタルは「眼鏡」（能力を拡張してくれるもの）と考えている。デジタルは能力を拡張するものと考えれば、先生方も授業の中でどのような使い方をすれば良いか、このような授業があればよいと思いつくだろう。「各授業でどのようにタブレットを活用すればよいか」という事前質問もあったが、子供たちが学びの道具、表現や思考の道具として使えるようになっているかどうかを確認して考えなければならない。

活用事例をいくつか紹介する。授業の枠組みに注目してほしい。仙台市にある公立中学校で、ロイロノートスクールのシンキングツール「くらげチャート」を活用している。注意しておくが、シンキングツールを使うことがゴールではない。シンキングツールを活用して、複数の人に評価してもらい、修正して提出することで、創造的思考を養うことにもつながる。

授業支援ツールを使用すると皆の回答が表示できる。これにより、無回答率が減る傾向にある。また、クラスの誰でも好きな回答を見てもよいということは従来の授業ではできなかったが、この実現により、多様性や寛容の心も養っていくことができる。このような体験を中高6年間ですることによって創造的思考ができるようになる。

デジタルドリルについて話す。「個別最適化の学び」というキーワードからは、皆いろいろな学びの形を想像する。デジタルドリルにもいろいろあるが、基本的には問題が自動出題され、子供たちが解答し、自動採点される。子供たちがそれぞれ間違えたところをAI（学習履歴）で分析し、傾向を明らかにする。過去に勉強した履歴をデジタル化できる。これを使うことで先生が不要とはならない。使い方もそれぞれで、例えば、「アタマプラス」を利用し、1人1人が勉強し、分からないことがあれば、先生に聞いたり、生徒同士で相談したりする機会を設けることができる。もちろん、反対に全部デジタルドリルで授業する学校もある。デジタルドリルに関しては、どのように通常の授業と組み合わせるかが重要となる。デジタルドリルはすべてデジタル上で解答するため、図形問題や証明問題は大変である。しかし、「リブリー」というサービスは紙で解答させる。自動採点でなく、自己採点を採用している。デジタルドリルは幅が広いので、各学校にあったサービスを探してほしい。

Google Earthを授業で利用する先生方も多いが、活用していない先生は授業でぜひ活用してほしい。例えば、地形の色で鉄鉱石等の採掘場や原産地を画像で見せる方法がある。Google Earthを使って学校外でも勉強できるようになることは重要だ。Google 翻訳を世界史の授業で利用し、歴史的な事象を英語ではどう書かれているかを読み、生徒たちに分散してジグソー法でグループが発表する授業を行う学校もある。Google 翻訳を中学校・高校の授業で使うことを疑問に思う先生もいるだろうが、変な訳があったら自分たちで色々調べ始める。道具としてどのようにデジタルを使っていくのか。経験があるかないかが大きい差になる。1週間の振り返りをGoogle ドキュメントに書いて提出させるケースもある。この振り返りをクラウド上でやると、子供たちと先生が同時に見ることができる。やり方は様々だが、例えば、1つのファイルに書き続けていけば過去の振り返りも容易だ。3D プリンターを図書室に入れることで、デジタルに興味がない子どもが触れることができるようになる事例もある。先生方がデジタルは子供たちにとってどのようなものなのかを価値づけないと子供たちはうまく活用できない。教材配布や教材回収の道具でもオンライン会議ができる道具でもない。もっと子供たちにとってデジタルは大きい意味があることを知してほしい。

「利活用目的について詳しく説明してほしい」、「1人1台デバイスを用いた教育のあり方」、「個別最適化の教育環境、手段と目的が混同している」という質問があった。事例をいくつか挙げてきたが、デジタルをどのように活用するかはバラバラだ。どこを中心に使うかである。ICT導入で効果があった学校の特徴は何のためにICTを導入しているかをどの先生も言えることだ。目的がはっきりしていることも重要である。ICTを導入する目的は9類型あると考えている。①興味喚起（学習内容にあまり興味を持っていない生徒に対して興味を持ってもらう）、②モチベーション喚起（やる気を出させる。外部からモチベーションを高めることで学習意欲を高める）、③理解促進（現行の授業で説明しにくかったり、わかりにくかったり、理解を深めるために）、④授業効率化、⑤進捗確認・理解度確認、⑥教材拡充、⑦表現手段拡充・思考手段拡充、⑧情報共有手段の拡充、⑨学習環境の拡充である。

「すべてにおいて目的設定は重要だが、どの目的が重要なのか理解できていない」という質問があった。どの目的が重要かは学校で話し合えばよい。先ほどの9類型は先生が使うか生徒が使うかが混ざった類型になっている。授業の効率化のように先生が使う方を頑張るだけでなく、それを乗り越えた上で、生徒が使う方も頑張ることができる。ここでデジタルは先生が楽をするためのものではなく、子供たちがより多くのことを学び、表現し、考えるための道具であるという認識が必要になってくる。

「文部科学省から『教育の情報化の手引き』が出されているが、その中でタブレット型の端末を利用した方が総得点は高く、一方で評価観点別の成績（中学校）で見ると知識理解の項目ではタブレットの優位性がなかった。学習効

果について根拠となる事例等あれば知りたい」という質問があった。エビデンスを作る側で企業として参加するケースが多いが、タブレット端末 1 つ入れて劇的に変わったというのは大変おこがましい。学校現場で子供たちがどのように変わっていくのかを先生方が見ていくことが大切だ。

●分散会 ● 「主体的な探究学習の実現に向けて～ICT の効果的な活用を考える～」



5 グループに分かれ、①ICT 活用、②探究、③新学習指導要領・大学入試をキーワードに情報交換を行った。

各グループの司会・進行は、森涼・専門委員長（学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長）、鈴木弘・専門委員（香蘭女学校中高等科科长）、北村聡・専門委員（京都外大西高等学校前校長）、須藤勉・専門委員（東京私学教育研究所参与）、平方邦行・所長の 5 名が行った。また、各グループには田代浩和・視察校校長を含め、5 名の視察校の先生方に参加を頂き、参加者と質疑応答を行った。

●分散会報告 ●

分散会の司会・進行担当の専門委員・所長より、各グループの協議内容を報告頂き、参加者全員で共有した。

○森 涼・専門委員長（A グループ）

前半は全体での情報交換、後半は 4 名程度の小グループに分かれて情報交換を行った。

全体では、まず探究に向けた取り組みについての協議を行った。ほとんどの学校でまだ手探りの状況であった。探究を行う学年も 1 学年から 2 学年という状況であった。SDGs をテーマにし、1 年次はインプットのツールとして行い、2 年次はアウトプットとして発表形式に持っていき、3 年次は模擬訓練という形で行うという実践報告もあった。各校の iPad の活用状況の話に発展し、常翔学園の先生から、探究だけではなく、ほぼ全教科で iPad を活用している等、先進的な事例の発表があった。

A グループは数学科中心に編成されていたので、数学の授業での ICT 活用、展開が話題となり、多くは問題の配信や選択をする際の活用だった。その中で教科書の QR コードを読み込ませ、子どもが関心を持ち、楽しめる展開をしている学校もあった。探究で身についた力の検証についての質問があり、ほとんどの学校がそのシステムを持っておらず、常翔学園のルーブリックが優れているという認識をした。学力と違って、人間力を測るものさしはルーブリック以外ではなかなか難しいという結論であった。「情報」についても手探りの状況が続いており、高校 1 年で行う学校、高校 2 年で行う学校、入試のために高校 3 年で演習を計画している学校等、様々であった。

学校で 5 年前に比べて変化したことはあるかという質問があり、紙が減った、インフラ（ハード）が整備されたという話があった。ソフト面では校務の効率化を図るためにペーパーレス化を図る、そのために ICT 機器を全職員に配り、先生方の意識を高めるという紹介もあった。探究、情報ともにまだ手探りが続いていくという結論であった。

○平方邦行 所長（B グループ）

ICT に関しては教師も生徒も共に所有する方向に向かっていく傾向だ。ただし、いろいろな不安があり、特にトラブルが起こった際、解消できる人材の不足がある。地域によっては支援員がすぐに見つかるが、そうでないところもある。一定の年齢以上の先生方には不安感があり、その不安を払拭しないと、全員が 1 つの方向に向かうことは難しい。

探究はまだ始まったばかりで、どのように進めていくかが多くの学校で定まっていない。学校によってはすでにチームで進めている学校、外注で進めているという学校もあった。また、学内で少し工夫し、若い教員中心で進めていくという学校もあった。

新学習指導要領に関して、双方向の授業に変わっていかねばならないが、ベテランの先生は昔の成功体験を捨ててまでやっていくのが難しいよという意見もあった。そのため、学内で分担をして進めることも大切である。多くの学校でやらなければならないことに悩んでいることが伝わってきた。特に新学習指導要領に関することは、今の高校 1 年生のことで、その子供たちが大学を受験する 3 年後、さらにそれ以降のことを進めていかねばならないが、なかなか難しいということであった。

○鈴木 弘・専門委員（C グループ）

前半は各学校の現状や悩みを聞き、後半はその悩み等について話し合った。主として 3 つのテーマがあり、1 つ目は年配の先生が新しいことについていけない、考え方の違いがあるという内容。これに対しては、若い先生がワンツーマンで年配の先生に付き、教科間でバックアップするという工夫が報告された。2 つ目は ICT 活用を進めていくために、先行している学校の情報や反省点を今後役に立てたいという内容で、これに対してはハードの問題で後から改善すると費用がかかるので、配線やコンセントの位置等は気をつけること、英語の授業で使用するスピーカーの採択は注意

をした方が良いというアドバイスがあり、細かいが貴重なことだと感じた。その他にも、教員が今以上に仕事を増やすことは難しいので、外部指導員の導入等もしっかり考えておくという意見もあった。フィルターの問題も話題となり、基本的には外したいが、生徒指導上の問題がある。双方向で他のことができないような授業が必要であり、教員の力に任せたいという意見があった。3つ目は新しいものへの対応は学校として管理職がきちんとした方針を出してもらわないとやりづらいという意見であった。

○北村 聡・専門委員 (D グループ)

ペアでの話し合いで進め、その後で話し合った内容を発表し、共有した。ICTに関しては、普及はしているが、生徒へどのように活用させるかを検討しているという意見があった。探究学習については、従来型の進学指導との絡み、従来型の進学指導に固執する教員が悪いということではなく、お互いに工夫していく必要があるという意見、探究学習を進めることにより、結果的に進学実績にも良い影響が出ているという意見があった。スクールポリシーの構築(建学の精神との関連)、カリキュラムの構築、ルーブリックの構築についての事例報告もあった。

○須藤 勉・専門委員 (E グループ)

国語科で古典探究に関する言語活動について、どのように進めるのかが知りたいという質問があり、それに対して、「モデル授業を教員が行い、課題を割り振り、調べ学習をさせ、まとめてグループ発表させた後、他クラスで10分間の授業を行い、授業後、良い点、悪い点、興味・関心を考える」という事例、さらに、「古典を小説として授業を行い、読み比べをさせる」、「教科書を読み、図書館で内容を深めていき、その際、キャッチコピーを作ると生徒の思考を深められる」という事例の報告があった。

ICTでの指導方法に関しては、グループ内ではBYODを採用する学校はなく、タブレット等を学校で一斉に買わせているということであった。

また、ICTの教職員への研修について、常翔学園では新任教員に行っているということであったが、他校からは、教員の年齢層が高く、ICTの研修をどうすれば良いかが悩みであるという意見があった。

観点別評価や総合的な探究の時間の評価方法についての質問があり、「良い授業について話し合わせている」、「グループ発表をさせて自己評価・他者評価・教員評価をしている」、「評価に差が出ないようにビデオに録画して修正できるようにしている」、また、「シラバスに観点別評価について記載している」、「知識・技能は50点その他は3観点に合わせて評価をする」といった事例報告があった。

●閉会式●

◆総括 森 涼 教育課程専門委員長

常翔学園中学校・高等学校の視察については、コロナ禍にも関わらず、快く受け入れて頂いた上に、献身的に対応して頂き、田代校長先生をはじめとする教職員の先生方には衷心からお礼を申し上げます。

視察校の実践発表では、国語科の中でのICTを活用した実践の報告があり、今後、先生方が探究授業を進めていく上で、大変参考となった。2日目の平方所長の講演は、いち早く知識偏重から脱却し、いかにして学校現場で創造的思考力を身に付けさせるかという大変深い内容であった。特に衝撃的であったことは、GDPの変化である。すでに世界4位となり、どんどん衰退していく日本経済を立て直すのは誰なのか。これは今の若者であろうと考えている。2089年の日本がどうなっているのか。憂うのではなく、2089年に向かって、取り組んでいかなければならないことを改めて感じた。為田先生の講演は、デジタル機器はあくまで目的ではなく、手段である。子供たちが思考力や表現力を養う道具とすることが大切であるという内容であった。小学校、中学校の様々な実践事例の紹介があり、道具としてデジタルをどのように使っていくのかを改めて考えさせられた。2つの講演を聞き、ダーウィンの「最後に生き残っているのは強いものでもなく、賢いものでもなく、変化ができるものだ」という言葉がよぎった。先が見通せない時代に我々が、いち早く1人の個人として、そして学校として変化をしていくことが喫緊の課題であると思知らされた。

今回の分散会は例年より1時間多い、2時間で行った。多くの情報交換ができたのではないかな。是非とも学校に持ち帰って、今後の私学教育に活かして頂きたい。

新学習指導要領は始まったばかりである。まさにスタートしたばかりであり、2日間で得た大きな学びや気づきをそれぞれの学校の指導の中で生かして頂ければ幸いである。

◆閉会挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

日本の社会は大きく変わろうとしているが、変わり切れない。どうしても自分の周りのことを中心に考える。しかし、世界はそのように動いていない。私立学校が一番大切にしなければいけないことを考えて頂きたい。公立学校との大きな違いは建学の精神だ。大切なことは先見性、先進性、加えて、特異性である。これを失うと、私立学校ではない。先生方は、「今は変革の時代だ」という認識のある方々だと考えている。それがなければ私立学校は変わらない。今回の研修会では、全国各地の学校の先生方に参加頂いた。日頃できない情報交換もできただろう。その意味では本当に貴重な時間だったと思う。当研究所は今後も全国的規模の研修を予定しているので多くの先生方に参加して頂きたい。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とドイツの宰相ビスマルクが言っている。この言葉を引用して、落合陽一氏は著書の中で、「自らの経験ばかりでなく、先人たちの経験、つまり歴史を学ぶことでより良い判断ができる」、また、「本当の愚者は何事からも学んでいない」と書いている。自分たちの学校がこれからどういう方向に向かえばよいのか、これは私立学校であるが故に、周りから試されていることでもある。

●参加者アンケートより● 回答数：86名／参加者数：128名（回答率67%）

○当研修会への参加動機

研修会の参加の動機は、ほとんどがICT活用と探究への興味関心であり、加えて、新学習指導要領やそれに伴い、教科「情報」、大学入試に関して視察校や参加者との情報交換であった。

○学校視察（常翔学園中学校・高等学校）についての感想

◇学校紹介

学校紹介では、①豊富な探究授業（意欲的な取り組み・多くのプログラム）、②キャリア教育に重点、③教育イノベーションセンターの役割、④細やかな指導、最先端の施設・設備、⑤明確なビジョン（目標）、⑥「学校ルーブリック・教科ルーブリック・行事ルーブリック」、⑦教科横断、⑧グローバル教育（豊富な海外研修）、⑨指導と評価の一体化、⑩積極的に継続的なICT活用が参考になったといった感想が寄せられた。

◇授業視察

ほとんどの授業でICTが活用され、生徒と先生が当たり前のようにタブレットを使用し、効率よく授業が行われていること、探究を授業内で行うように先生が工夫していること、ロイロノートやJamboardとプリントの併用、また多くの授業でグループワークが行われていたことが参考になったようである。また高校3年生のガリレオプラン探究Ⅱ（発表）や生物授業での動画作成、音楽の授業でのICT活用に興味関心が寄せられていた。今回47の授業を公開頂いたが視察時間が1時間であったため、2時間を希望する声もあった。

◇施設見学

施設・設備が充実している、同フロアの異なる学年教室でも吹き抜けで区分する配慮がある、限られたスペースをうまく利用している、生徒のことを考えた施設、巨大なフーコーの振り子から教育の理念が伝わったなどの感想があった。見学時間が少なかったため、もう少しいろいろ見学したい、時間が欲しいと言った要望もあった。

◇実践発表

指導と評価の一体化（3観点評価のためのグループワークの取り組みとICT活用の組み合わせ、教科での単元ルーブリックの作成）、Jamboardの活用やIBのLPを活用、OPEN QUESTION、国語科でのICT活用（既存ソフトの取り入れ）、さらにルーブリックの作成やファシリテーターの育成に関心が寄せられた。

○講演についての感想

社会が大きく変化する状況で、教育が変わらなくてはいけないこと、現在だけでなく、未来も見通していく必要があること、「主体的で対話的で深い学び」は生徒の興味関心が必要であり、創造性を養うこと、そのために自由の容認と寛容性が必要であることなど、今後の教育の参考となる内容といった感想が多かった。また、ブルーム型のタキノミーのA軸・B軸・C軸に関する考察や創造的思考力、思考コードのキーワードが印象的だったようである。

○基調講演についての感想

ICTの導入について、目的の重要性について具体例を交えた内容でほとんどの参加者が共感・参考になったという感想が寄せられた。また、情報Ⅰのデータサイエンス、プログラミングの授業での外部の講師の活用や教育ICT利活用の目的9類型についても大いに参考になったようである。

○分散会についての感想

テーマの中では、特にICTと探究に関する情報交換が大いに参考になったようである。グループによってはかなり大人数になったが、途中で小グループ（4人程度）での協議も行い、好評であった。また、各グループに視察校の先生方も参加して頂き、視察校への質問も交え、有意義な協議・情報交換となった。2時間の協議時間であったが、短く感じた参加者もあり、さらに教科毎のグループ編成であったので、科目毎の協議の要望もあった。

○研修会全体についての意見・感想

プログラムの内容は、タイムリーな内容で、他校の先生方との情報交換、学校視察（機会が少ないため）、実践と理論をバランス良く取り入れられていた等、多くの参加者から高評価を頂き、参考となる内容が多々あったとの感想を頂いた。反面、従来の研修スタイルにこだわらないスタイルも取り入れて欲しい、前方のスライドが見づらいとのご指摘も頂いた。

○今後の研修会への希望

研修会への要望としては、探究に関する内容が多く、次いで評価、大学入試、ICT活用の内容の希望が多かった。探究については「創造性」に関する内容の要望も見られる。いずれも今回の内容からもう少し踏み込んだ内容が見て取れる。その他、学校視察、小グループのディスカッション、教育懇談会（さらなる情報交換のため）の要望もあった。研修会の形態等として、Jamboardなどの無料アプリで128名全員が発言できる環境にしてほしい、創造的な形式の研修会、対面形式での研修会を継続して欲しいとの意見があった。

都道府県別参加者数

No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数
1	北海道	2	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	1	34	広島	7
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	2	20	長野	1	36	徳島	0
5	秋田	1	21	岐阜	2	37	香川	2
6	山形	0	22	静岡	2	38	愛媛	3
7	福島	0	23	愛知	6	39	高知	2
8	新潟	1	24	三重	2	40	福岡	3
9	茨城	1	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	21	26	京都	6	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	21	43	熊本	0
12	埼玉	0	28	兵庫	4	44	大分	3
13	千葉	4	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	5	30	和歌山	0	46	鹿児島	1
15	東京	16	31	鳥取	4	47	沖縄	0
16	富山	2	32	島根	3			
							合計	128
							参加都道府県数	28

教科別参加者数

教科	人数
数 学	25
理 科	21
国 語	15
英語・外国語	10
地歴公民(社会)	28
情 報	8
その他 ※	9
管理職・事務職員	12
	128

(※音楽・工業・商業・美術・保健体育)

次年度(令和5年度)私立学校専門研修会・教育課程部会は
[東京都豊島区・豊島岡女子学園中学校・高等学校/サンシャインシティ会議室](#) [コンファレンスルーム](#)において
[令和5年6月23日\(金\)~24日\(土\)](#)に開催致します。